宮内省御用達 味の素本舗 株式會社 鈴木商店 東京 大阪

粂平内 (162)

小金井蘆洲 演
福田勇 畫

虎穴に入る (二)

鶴佐峠を越えればもう長州領だ。道を急いで萩の手前森井村へやつて來た。

途で無法者の浪人共が茶店の老夫婦に云ひ掛りをつけ虐めてゐたのを、見るに見かねた鐵扇齋散々これを打ちこらしめたので急をきいて駈けつけた萩藩の家中の者、多勢を頼んだが何しろ相手は、天下の豪傑鐵扇齋、これも散々に打ちすゑられた。

毛利藩の不名譽、今はこれ迄なりと、名代の豪傑春藤源太左衛門正久が總大將となり、栗毛の駒に打ち跨り十八貫の鐵棒を輕々と提げ、それへ乘込んで來ると喚めき

「いや參つた。拙者今日まで數多の豪傑と出逢つたが、御身くらゐの剛力も初めてだ。及ばずながら拙者……」

ヒラリ體を躱して、鐵扇齋金鐵の先を掴んで引つ張らうとした。

對手もさる者、死力を盡して互ひにもみあふうち、素より剛力無双の鐵扇齋、金鐵諸共源太左衛門を馬上からズル〳〵と引下した。

すかさず飛付いた鐵扇齋は、左右の腕の下に手を入れて、足を掬め大地へドッと倒して跳いて、胸倉をとり、馬乘りとなつた。

「さアどうだ、春藤とやら、快く太守の目通りへ案内すればよし、なほ四の五の申すにおいては息の音止めるぞ」

源太左衛門はいと苦しげに、

騷ぐ人々を制し作ら、大音聲に、

「やア〳〵それに控へたる薬浪人殿に聞け、我こそは毛利家にきこえありと聞えたる中國名代の豪傑春藤源太左衛門正久なり、薬浪人の身を以て當家の藩士を手籠めにすること奇怪至極、罪の次第は役所にて取調べ遣はす。潔く縛り頂戴を働きたるかどを以て召捕らねば相成らぬ、本名名乘つて潔く縛につかれ」

「薬浪人呼ばはりは無禮、汝は中國の豪傑か知らぬが、我こそは天下にその名を轟かしたる粂平内兵衛今城めて鐵扇齋長守といふ者だ。毛利家に武術の指南あつてわざ〳〵罷り越した者である、神妙に案内すればよし、さもなき時には汝の命を此方へ貰ひ受けるがどうだ」

と睨くより春藤は驚きの眼を瞠り、

「なに粂平内とな。さすれば以前鶴井家の禄を食みたる家来小姓か」

「如何にも……大藩の威光を笠に着て常に鶴井家を護る不屈な所行。百々に守に面晤して一泡吹かす心得ぢや」

と落付き拂つた音聲に春藤源太の如く憤り、

「いや不埒千萬なる汝の大言。聞棄てには相成らぬ。いでや、眼の手前見せて呉れる」

十八貫の金鐵棒振廻し打込んで來た。

「よし來た」

らゐの剛力も初めてだ。寔に御無禮を仕つた。及ばずながら拙者度殿においとりなし仕らう」

といふので、鐵扇齋は押へた手を放し、源太左衛門を引起し、

「いや流石は中國名代の豪傑春藤氏、掘みを乗て、快よくおとりなし下さるとは忝けない。さらばお供を仕らう」

春藤源太左衛門の邸の奥座敷では、主人役の春藤と鐵扇齋が、今は十年知己の如く打ち解けて酒宴の眞最中。

春藤はどうかしてこんな天下の豪傑を我が毛利藩に抱へたいものと、說きすゝめたが、素より、二君に仕へぬ決心の鐵扇齋、春藤の好意は有難いが、

「拙者が毛利の太守に拜謁願ひ度いと申す譯は、鶴井家との交誼を結んで頂き度いのでござつて、その外に少しの望みもござらぬ」

と、堅い決心の程を察した春藤も何とかして御家を巧く取りなし度いと深く堅してゐる所へ、

「お簡御用人雁部右內殿御使者として、御越しにござります」

と若侍が報じて來た。

京日特選棋譜 (16

八段 高部道平氏（先番二）五段 小澤了正氏

最早終局　覆面道人

本局も最早終盤に近い。今日の手番は白であつて、右側に白二百十二と、その上の白丸一子を粘いだその手は二目。だが白二百十二は得望を解消する。そして白二百十二と、それも二目であつて、それ

次に二百十三の所で、更に白地五目位は出來やう。

それで黒二百十三と、その白の右下隅に白二百二十以下二百二十二と、それも二目であつて、それ

白二百十二より黒、四、十八まで

四も、また二百十八も當然で白の先手。しかし黒もその中で二百十五と先手を取つた。

それで道人は白二百十四で（い）でも、白によかつたと思ふが、しかし白が（い）を認めないのは、その白の…[illegible]…

その白の滿足は、どうやら…[illegible]…にも判る。薬八見いが、白黒の取つた取石を、碁石入れの蓋から首を左右に振つてのぞくと、白が一目、黒が五目。黒の取石は四目多い。

碁石の蓋など覗くと「薬八見い」と云つて笑はれる。覗かないでも盤面の接戦の跡で明瞭に白黒の取石は判る筈。それが薬八ならば對局者の微笑ですむが、修業中の門生なら、先生から怖い眼で「こ奴まだ未熟だな」と睨まれる。

それで、黒二百二十二は先手、一目。碁とは白二百二十四と破つて、其二路上に、半劫が殘つたから合理計算である。

また黒二百二十五は、白かつその點を來られて、先手一目といふ所。更に白二百二十八までは、その方に白一目出來ると見られ、白が一目得望の手。

以上で後は二、三ヶ所、最早終局に近く、勝敗の數は歴然。讀者本譜の盤に、白丸、黒丸と、それに譜面にない石も明瞭だから、目算も容易であらう。

初夏の衞生に就て

醫學博士 本田建義

…[illegible]…爽快を感ずる季節でありますが、…[illegible]…

然し油斷がならず彼の怖しい各種の傳染病殊にとして消化器系統の傳染病たる「チブス」か「赤痢」の如きが發生する時期に面近なので御斷りは大體で私は本日の家庭講座の時間に初夏の衞生といふ題下に先づ腸チブスと赤痢の兩方面より見た衞生に就て申述べ傳染病の消化器系統の傳染病に對する今頃から心得置くべき衞生的注意と云つたやうなものを附け加へお話しようと思ふのであります。

今日のプロ

十日(月) 第一放送

午前六時 (東) 體操
同六時三〇分 (東) 國語講座 (十一) 武內大造
同七時 天氣見込
同七時一分 (東) 朝の修養 中根環堂
同九時二〇分 氣象
同九時四五分 料理獻立 (リ・アラ・シヤズ)
同九時五五分 (東) 家庭メモ
同一〇時三〇分 (城) 家庭講座 初夏の衞生について 醫學博士 本田建義
正午 (東) 時報外
午後零時五分 (大) 琵琶 楠木正成 鐵水
同零時三〇分 (大) 國民歌謠 一、獨唱 嫁ぐ日近く 二、齊唱 祖國の柱 獨唱 西川温子
同零時四〇分 ニユース 齊唱 大阪放送合唱團
同一時一五分 婦人の時間 (朝鮮語・釜山) 時代と共に進みませう 李毓玉
同二時 (城) 小學生の時間「第四」 京城師範學校附屬小學校 四學年女子兒童 指揮とピアノ伴奏 菅一市 唱歌 一、春風 二、海 三、こもりうた 四、かじやさん 五、樋中佐
同二時三〇分 (東) 野球試合實況 (豫備日)
同二時三〇分 (東) 家庭講座 季節の家庭衞生常識 (一) つはりの手當 醫學博士 岩田正道
同三時一〇分 敎師の時間 特殊敎育の體驗を語る 古岡鐵之助
同四時 ニユース・外 (釜山)
同四時 (東) 夏場所大相撲實況 (四日目)
同六時 (大) 連續童話劇 日出ちやんのお手柄 (第二回) 佐々木邦作 春の卷 (二)
同六時 (城) 兒童と先生の時間 (第二放送・京城・平壤) 大阪放送童話研究會
京城竹添普通學校 朗讀と話方 一、アサ (讀本卷三第二課) 二學年 一、大蛇たいじ (讀本卷五第四課) 三學年
同六時二〇分 (東) コドモの新聞
同六時二五分 (城) 講演 (京城・釜山) 朝鮮の鑛業について 工學博士 [illegible]
同六時二五分 西鮮三道の時間 (平壤) 西鮮に於ける鐵道事業の今昔 平壤鐵道事務所長 大和田[illegible]
同六時二五分 (東) 英語講座
同六時五五分 (東) カレントトピツクス
同七時 ニユース外
同七時三〇分 (東) 講演 英國皇室の歷史
同八時 (東) 小唄 一、[illegible] 二、[illegible] 三、[illegible] 四、[illegible]
同八時一〇分 (城) 歌謠曲 府民館より中繼
一、伏見信子 (イ) 十九の春 (ロ) 花言葉の唄
二、松平晃 (イ) 博多夜船 (ロ) 紺屋可愛や (ハ) 夕日は落ちて
三、伏見・松平 (イ) 初戀日記 (ロ) いつも陽氣で
同八時三五分 (東) 新內 [illegible]
同八時五五分 [illegible]

第二放送

同九時三〇分 (東) 時報外
同一〇時 ニユース (朝鮮語・釜山)
午後零時五分 脚本朗讀 沈影
同一時一五分 婦人の時間 李毓玉
同六時 兒童と先生の時間

八景の內
第一景 かさね道成寺 (長唄)
第二景 木下川八景 (清元)
第三景 かさね音頭 (長唄)
配役
かさね 吾妻春枝
祐天上人 吾妻春壽郎
僧 祐念 吾妻春世
同 祐然 吾妻春鈴
外大勢

あすの聞き物 十一日(火)

午後零時五分 (城) 三曲合奏 松竹梅 尺八 古本竹聲
同七時三〇分 (東) 舞台中繼
同八時三〇分 (東) 落語 名作選 (第一夜) 柳家小さん
同六時二五分 (東) 英語講座 宋文憲
同七時三〇分 宗敎講座
同八時 洋樂
同八時三〇分 鳥づくし外 邦樂・外
同九時 連續講談 申鼎言

ラヂオ

京城府民館より
伏見・松平唄ふ
夜八時一〇分から中繼

歌謠曲 (以下歌詞略)

伏見信子

一、イ・十九の春
A、ながす淚も彈きみちしあはれ、十九の春よ春、蛍摘みつゝ、散る白露に泣きし十九の春よ春
B、君はやさしく、淚は甘く唄をうたへば、花散りぬ乙女、振袖ゆく白雲もわれを眺めて流れゆく
C、我世さみしく嘆くな小鳥春はまた來る花も咲く變のひかりに夜はほのぼのと明けて十九の春よ春
ロ、花言葉の唄
1、可愛い蕾よ、きれいな夢よ乙女ごころによく似た花よ咲けよ咲け〳〵明緣夜露咲いたらあげましよ、あの人に
2、風に笑うて小雨に泣いてなにを夢みる雨花夜花色は七いろ想ひは十色咲いたらあげましよあの人に
3、白い花なら、別れの淚紅い花なら、うれしい心靑い花なら、悲しい心

國民歌謠

嫁ぐ日近く

歌…詞

高橋掬太郎作詞
[illegible]作曲

(一) 嫁ぐ日近き夏衣、縁の葉の香うつりして、頸にふるふわが髮に、胸はかよわくときめきぬ
(二) 紅椿の赤く咲る日は、いとしき七つの妹と、悲しき別れ思ひ出に花の髮飾を挿させまし
(三) 緣の淚に薔薇咲きて、夕餉つくるは今朝のゆめ、語るに惜しき夢なれば、ひとりひそかに占ひぬ
(四) 鏡に映る頰上に、われも笑顔をかへすとき、袂に香るさまざろしは、誕生過ぎ來し雨風

祖國の柱

大木惇夫作詞
服部良一作曲

(一) 高梁枯れて黑鳴く、赤き夕陽の國境、思へば悲しつはものは、曠野の露と消え果て、今は眠るかこの丘に
(二) 祖國の爲に捧げたる、いとも尊き人柱、黃塵すかばね塹あらば、わが呼ぶ聲に碍して、嗚呼動けよ秋風に
(三) 手向の花は涸れども、赤き夕日の丘に染みて、風愁々の音を怨ぶ、幽魂永くとゞまりて、祖國を護れ亡き友よ